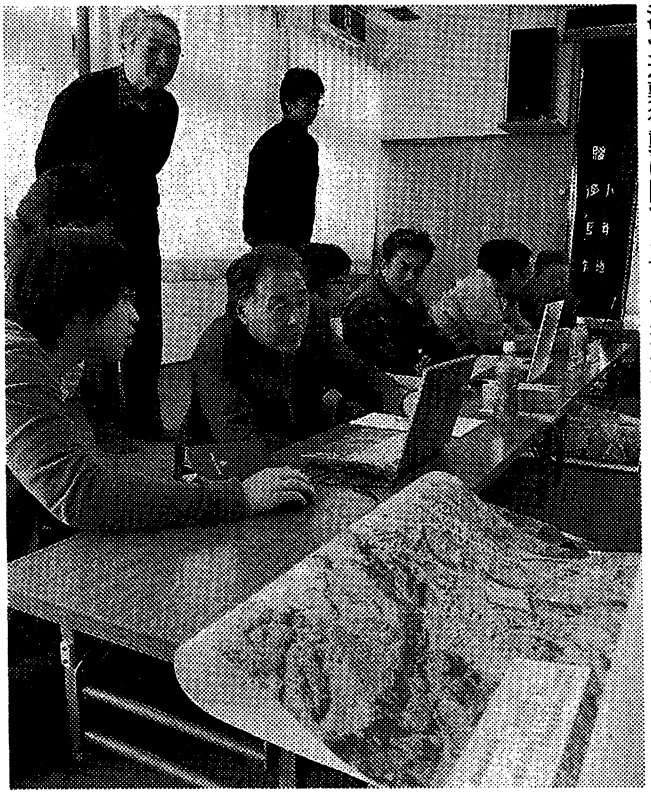
朝日新聞　第16174号　平成23年(2011年)10月20日(木曜日)　日刊(月曜日休刊)

津波被害 地図データ化

越喜来地区で調査報告

國學院大 吉田教授ら 低地利用の参考に



國學院大学文学部歴史地理学教室の吉田敏弘教授らのグループが18日、大船渡市三陸町越喜来で行った東日本大震災の被害調査成果を関係区長らに報告した。

吉田教授らは6月、同地区における津波被害状況の大縮尺地図化(2000分の1)、今回の災害時における避難行動の記録、被災状況や避難行動に関する各種情報のGIS(地理情報システム)上での統合を目的として調査を実施。

学生らが、同地区内の津波到達ラインに沿って現地調査を行い、損傷、浸水した家屋の写真を撮影したり、被災の状況をノートに記録しながら被害の実態を確認。可能な地点では、津波の到達高も測定した。吉田教授らは、持ち帰った調査結果を元に、被災前と被災後の航空写真に等高線を入れる作業などを行い、9月末に完了した。

この日の報告会には、吉田教授と同大学院生、三陸の津波について研究している同地区の及川忠之丞さん、同地区南区の森斌区長、同西区の熊谷秀一区長、同東区の坂本三也区長ら約10人が出席。院生らがパソコンを使用して津波の到達点、家屋の被害状況などを説明した。

今回の報告会で使用された地図データは、建物の被害状況を色分けして表示してあり、調査地点をクリックすると画像も表示される。

また、50㌢、1㍍、5㍍と、三つの間隔の等高線が引かれており、被災後の航空写真と重ね合わせることによって、津波の到達高を詳細に知ることができる。

10月末にはインターネットで閲覧可能になる予定。その後も越喜来地区住民からの津波被害情報などに関する要望をデータベースに追加し、地図データの充実を図っていく。

データを見た区長らは「参考になる部分がたくさんある」と話し、吉田教授は「調査を進めながらさらに分析して、データに反映させていきたい。低地利用の参考になり、復興計画に少しでも役に立てれば」と意欲をみせていた。

学生らが地図データについて区長らに説明＝三陸町越喜来

2011年10月20日付け
東海新報より